

Freude

vol. 5.30 2023.7.26 wed

8/2(水) 96K 160K 11/10 教会 23天 玉環 CC

チケット状況 7/12	S	A	B	合計
販売席数→	698	76	40	814
7/1,2 予約数	239	9	12	260
7/12 予約数	78	3	10	91
予約合計	317	12	22	351
残	381	64	18	463

板井ますみさんのこと

アルト 板井ますみさんが、お亡くなりになりました。7/1、2、12の練習を連絡なくお休みされたので、おうちに電話したところ、通常は東京にお住いのご息が電話口に。板井さんは、7月5日～6日ごろ、ご自宅で急逝されたとのこと。心筋梗塞でした。

板井さんは1962年入団、文字通り「創立からの団員」です。いつも「団のために何かしたい」と思ってくださいました。毎週の「体操のおねえさん」であることは、ご存じの通り。また、事務局があったときはキーボード等荷物を会場まで運ぶチームリーダーでした。団の問合せ電話は今でこそ団携帯ですが、その前は「誰かのお

うちが窓口」で、板井さんも1990年代、電話窓口をしてくれていました。でもチラシ等に自宅の電話番号を掲載するとイタズラ電話等も招いてしまいますよね、板井さんは必ず一旦留守電で受けて、電話をかけなおす対応をとっていたのですが、なんと！その留守電メッセージが英語！う～ん、それ、合唱団への問い合わせの気がそがれない？な～んで苦笑したのを思い出します。歩くのが好きで「フロイデ山の会」をつくって事務局をされていました。ケーキ作りはパティシエ顔負け。コーヒータンネルのバリスタ顔負け。「喫茶店をやりたいのよ」と、ステキなカップ＆ソーサーをたくさん買い集めていました。ウィーンが好きで、よく飛んでってました。曲がったことが嫌い。疑問に思ったら納得するまではずっと拗ねてる!? チョット頑固。練習の録音は常に「カセットテープレコーダー」。人との付き合いは正直、不器用だったと思います。でも「人」が大好き。「人に喜んでもらう」ことが大好き。「板井さんネットワーク」には、OBOGも（古いOBOGの方で団事務局との連絡が途絶えてしまった方々も）多く名を連ねていて、山歩きしたり、手作りケーキをあげたりチケットをやりとりしたり、非常にマメにされていました。モチロン、ご家族のことも大好き。なんやかや言いながらご主人とはラブラブで、近くのレストランで食事しているところをよく見かけてました、という元団員からの情報多数。今回のステージも楽しみにされてましたよね！（今シーズン団員名鑑 7/1 発行）

※1992年発行のフロイデ30年誌より
一枚のチラシが縁で

30年前、はじめて「抱き合え、百万の人々」を歌い終わった時、思わず隣の人と手を取り合って喜び合いました。今と違い、まだまだ日本人がとてもはにかみやで恥ずかしがりやだった時に、本当に素直な感動だった様に思い起こされます。

当時の練習は、熱気あふれる櫻井先生の指導、片岡先生の発声法の指導があり、練習そのものが毎回、緊張と、自分の未熟さで冷や汗ものでしたが、先生方の心遣いで、楽しく、勇気付けられました。

また、本番での外山先生の細やかな（指折り）サインは、胸の動悸の激しい初心者に安心と無心を与えてくださいました。

何度も落伍しそうになりながら頑張り通せたのは、同じ団員との団樂と励まし合いがあったからだと思います。今では、互いに心の通じ合えるかけがえのない友となっています。

そうした縁は、一枚のチラシをふと見た、そのことが出発だったのです。 1962年入団 板井ますみ

いたい ますみ

A 1 板井 ますみ

団歴 1962年入団

いろいろありますが、参加できるのが「ホットタイム」です。又、皆既月食を体験出来たことが感動です。次回は??



おかしいなあ、板井さんが練習に来てないなんて。ずっとここにいらっしやる方だと思い込んでいましたよ。板井さん、寂しいやん。どこに行ったんよ。空高くで喫茶店、開いてはるかなあ。長年、おつかれさまでした。ありがとうございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。 アルト 吉田泉

外山雄三先生のこと

7月11日、外山雄三先生がご逝去されました。92歳。

1962年7月から練習を開始した第1回目の第九演奏会は、桜井武雄先生と外山雄三先生のもと、「アマチュアがプロの音楽家と一緒に最高の演奏会をつくる」の文字通り「誕生」でした。この「労音の大合唱運動」は1966年「フロイデ合唱団」と名付けられました。

外山先生は東京の方ですから、大阪では合唱指揮者の先生（最初は桜井武雄先生が指導されていました。亀井先生はもともと団員で1971年から合唱指導に入られました）のご指導を受け、要所要所で外山先生がお越しくださいました。フロイデ合唱団のチラシには「外山雄三・大フィル・フェス」と大きく掲げていました。神戸フロイデ合唱団、堺フロイデ合唱団も、外山雄三先生のもとで第九を演奏する団として活動していました。

私が入団した1986年の一コマ。外山先生の練習日、亀井先生が外山先生の横でご自身のスコアを広げ、細かい指示や音楽のもって行き方などを細かくメモされていたのを思い出します。団員300人のときでした。

フロイデ創立以来ずっと外山先生がフロイデ合唱団を指揮してくださっていたわけですが、それは「ずっとそうだから」では決してなくて、外山先生は「一緒に音楽をつくる信頼できる相手として毎回、私が合唱団を選んでいる、選びなおしている、合唱団も私を選んでいる」といつもおっしゃっていました。団員の誰か一人でも、音楽に真摯にとりくんでいない、と見えた時、外山先生はたとえ練習中であってもサッサと帰ってしまわれました。信頼を失ってはいけぬ、とピリピリしました。オーケストラもソリストも外山先生が人選されました。

当時の定例の演奏会は、冬の第九、夏の大曲でした。夏の曲を決めるうえで外山先生は、フロイデの力量を考えてくださりつつ、アマチュアではとても無理、と言われている曲も選ばれ、ときには、平和へのメッセージを込めた外山先生のオリジナル曲に取り組むこともありました。

1991年から、夏の演奏会は一年おきくらいのペースで亀井先生とつくるようになりました。その頃から運営委員の端っこにいた私は、打ち合わせの際など、外山先生が亀井先生とフロイデ合唱団の音楽のことや選曲のことを話したりするのを、まぶしく見ていたのを思い出します。

フロイデ合唱団もいろいろなことがありました。1985年に新音から独立したこと、1989年外山先生が合唱団に失望されて（団の態度や取り組み姿勢など、だと思えます）翌年の1990年は振っていただけなかったこと、1995年被爆50年にオリジナル曲を、と取り組み始めた時の阪神淡路大震災は、特に神戸フロイデにとって大変だったこと。またそれ以上に、昭和30年代と、平成ではまったく時代が変わり、仕事就業後に合唱団練習に参加する、という状況が難しい人が増えてきたこと。或いは、創立当時よりも手軽な娯楽がものすごく増えてきたこと。そんな中で合唱団は、慢性的な団員数減少（=台所ピンチ！）に直面するようになりました。2006年にはフェスティバルホールからシンフォニーホールへ、大阪フィルハーモニー交響楽団から大阪センチュリー（当時の名称）または、関西フィルへ。しかしこれは、節約（結果的に節約にはなりましたが）と言うより、団員の人数に適した響きのホールを選ぶ作業でした。そして、オーケストラも。同じオケでも時代とメンバーの変遷によって変化するため、外山先生は大フィルからセンチュリーへ、亀井先生は、長年信頼関係のある関西フィルへ、と選びなおされたのでした。

音楽を作る、ということに対して真摯であること、全力を尽くすこと、できることは全部やること、自分勝手に歌うことは音楽ではないこと、聴いてくださる方に届ける演奏をして初めて音楽が成立すること。などなど。外山先生はこのことを常に私たちにおっしゃり、また、ご自身も律していらっしゃるようでした。

外山先生の「共演者を選ぶ」目はどんどん厳しくなっていました。たとえば2009年の第九では、オーケストラは愛知県から、ソプラノとテナーは東京、アルトは長野、バスのソリストは韓国から、お願いするというようになりました。外山先生も長野県からお越しいただいていました。これは、の、団の台所ではどうしてもキビシイ。外山先生との音楽づくりは宝物だし、フロイデそのもの、という思いもありました、ですが団内で、なぜ交通費や宿泊費がかかる遠いところからソリストやオーケストラをお願いしなければならないのか、関西で選んでいただけないか、という声も少なからず聞かれるようになりました。ただ、共演者は音楽会の最終責任者である指揮者が決定するもの、切り離してお願いすることはできません。それで外山先生に、来年一年、亀井先生と関西の演奏家での演奏会を行いたい、台所を立て直したい、とご相談したのです。それは、外山先生との演奏会を一年お休みさせてください、ということでした。しかし、音楽家にとって「今」が大事「今だから、この演奏者と（合唱団も含め）この音楽」今、それを「できません」ということは、クチで言っている「台所を立て直してから」のとき、合唱団は果たして外山先生にとって信頼できる演奏者なのか、今やらずに、一年後なんて、一緒にできるかどうかなんて保証はない、ということも厳しく問われていたのだと思います。

この話し合いは、2010年に入ってからずっと続けていましたが、とうとう夏の公演のときに、2010年第九をもって外山先生との演奏会は区切りとする、ということになりました。当時の団長は吉田泉、外山先生は相当お怒りだったと思います。そんな話をするなんて音楽というのが全然わかってない！と思われたかもしれません。退団者も少なからず出ました。団にとってはお断りする以外無かったと思いますが、その話のしかた、もう少し何かなかったかなあ、と。ワタシ個人の思いとしても、一時はものすごく近い位置でお話を伺えた時もあったのに、最後はなあ、もう極悪人みたいなワタシになっちゃったなあ、そのまんまになってしまったなあ。

と、今の団員の方は、外山先生のことをあまりご存じない方もいらっしゃると思い、少し説明させてもらいました。区切りのときが、当時の団長の不徳の致すところで、アチコチに気持ちの迷惑をかけてしまいました。ですが、そんなことはおそらくひとつのエピソードに過ぎません。

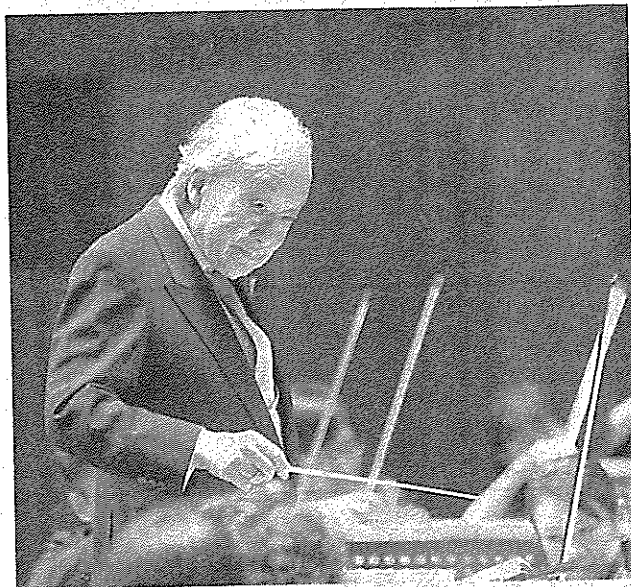
大事なことは、わたしたち大阪フロイデ合唱団にとって、いえ、日本の「音楽界」にとって、外山先生はとてつもなく大きな存在だということです。今、当たり前であることが、実は外山先生が初めて手掛けられて、その後広まったということは、数知れずあると思います。

7月11日、訃報は本当に急なことでした。私自身のこととしては「ご冥福を祈る」なんて、おそれおおくて言えません。あちらにいらしても、精力的に音楽を追求されているに違いないからです。ただただ、お礼申し上げたいです。外山雄三先生、ありがとうございました。

「御大、そちらではもう、ベートーヴェンに逢われましたか？」

2023年7月26日 大阪フロイデ合唱団 団長 吉田泉

虚飾なき響き 誇り高く



シューベルトの交響曲「ザ・グレート」を振る外山雄三さん。これが最後の舞台となった＝5月27日、東京芸術劇場、藤本崇氏撮影

指揮者であり、作曲家であり、優れた指導者でもあった。戦後日本のクラシック文化の礎となった外山雄三さんが11日、92歳で亡くなった。作曲家の池辺晋一郎さんと指揮者の広上淳一さんが、それぞれの「音楽家・外山雄三」を語る。

外山雄三さんを悼む

外山さんは1933年、作曲家の林光さん、間宮芳生さんと、日本人の民族的ルーツに根ざした創作を志すグループ「山羊の会」を旗揚げした。池辺さんは「外山さんは民謡のリズムや節回しを、泥がついた自然そのままに自らの楽曲に息づかせた」と言う。

60年、NHK交響楽団初の世界ツアーで披露された「管弦楽のためのラプソディー」がこの人の代名詞に。「余計な分析はせず、日本の民謡の原点をオーケストラで再現している。西洋の背中を追うのではなく、自分たちの響きを誇り高く追究する道を選んだ」

多作の人だった。「オーケストラ曲が中心だけど、合唱曲も意外に多い。戦後の『うたごえ運動』にも深く関わっていた。複雑に響きを絡めたりせず、声そのものをアカペラでシンプルに響かせるのが外山さんの流儀だった」

その小細工のない作曲スタイルは、指揮にも通底する。芸術家を標榜せず、職人に徹した。「安定した棒さばきで、楽譜を正確に再現した。自分の思いを詰め込んだり、拡大解釈したりすることは意

作曲家・池辺晋一郎さん 西洋追わず 民謡の原点を再現

指揮者・広上淳一さん 地方オケの底上げ、厳しく深く

識的に避けていた。それが外山さんの誠実さでもあった」

ある公演で楽屋をともにした時、化粧台に歌手で教育者としても知られた父、国彦さんの写真を立てていたことに驚いた。「すでに第一級の音楽家でいらしたのに。父に恥じない仕事を誓うことで、初心に帰っていたのかも」

広上さんは「全国の地方オーケストラのレベルを底上げするといふ、地味で誰もやらない、でも、とても大切な仕事を黙々とやり遂げた」と語る。

リハーサルでは多くを語らない。にやりと皮肉っぽく笑ったり、ギョロッとにらんだり。そのたびに楽員たちは震えあがり、「何がダメだったんだ」と必死に考えた。結果として、自我のそぎ落とされた、虚飾のない楽曲の像が立ち現れた。

外山さんは88年、音楽総監督を務めていた名古屋フィルハーモニー交響楽団のアシスタント・コンダクターに駆けだし、広上さんを抜擢した。「オレのまねはするな」が口癖。指導は厳しく、嫌みも日常茶飯事。しかし広上さんが落ち込んでいると、高級レストランへ誘い出し、店主に「うまいものでも食わせてやってくれ」。

名フィルの任期が終わり、指揮者を諦めようかと思いついていた広上さんに「オランダで国際コンクールがある」と突然電話をくれ、推薦状をタイプで打ち、語学学校まで探してくれた。優勝を報告すると、電話の向こうでしばらく言葉が失っていたという。

「コフモチで、みんな遠巻きに怖がっていたけど、懐に飛び込むと深く大きく包み、守ってくれる人だった。不器用で、寂しがりで、愛にあふれた人でした」

(編集委員・吉田純子)